

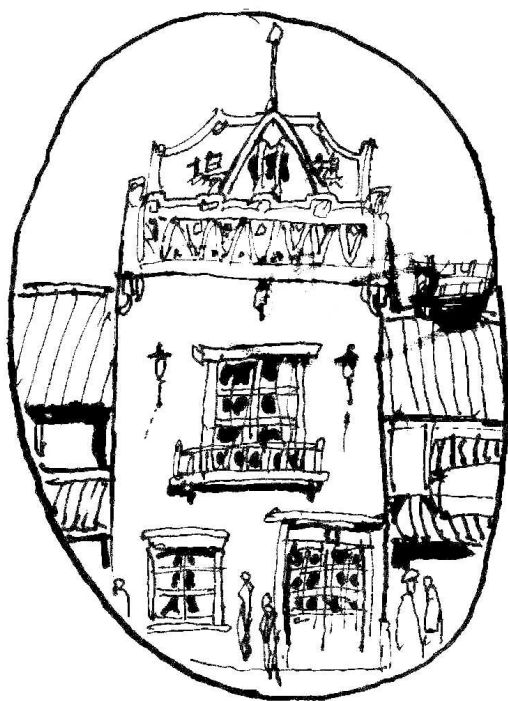
たべもの世相史・大阪

長谷川 幸延



たべもの世相史・大阪

長谷川 幸延



は　せ　がわ　こう　えん
長　谷　川　幸　延

明治37年2月11日朝、大阪・曾根崎に生まる。曾根崎小学校のみ。15の秋、劇界に入り、大正12年（19の春）道頓堀・角座、喜多村・小織らの新派に処女作を発表す。のち、NHKの文芸課嘱託を経て、昭和12年上京、『オール読物』に小説の第1作『お初天神』を発表。以来、芝居（殺陣師段平・その他）・小説（桂春団治・その他）の2本立てのほか、喋ることと、食べることとで今日にいたる。昭和18年新潮賞、昭和35年テレビ芸術祭賞、昭和43年大阪芸術賞受賞す。所属日本文芸家協会、日本演劇協会・放送作家協会各評議員。著作集のほか随筆集『大阪今昔』『自己流大阪志』『法善寺の人々』等あり。

たべもの世相史・大阪

定価九八〇円

昭和五十一年十一月二十日 印刷

昭和五十一年十一月三十日 発行

著　者　長谷川幸延

編集人　工藤　博

発行人　伊奈　一男

発行所　毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋

大阪市北区堂島

北九州市小倉北区紺屋町

名古屋市中村区堀内町

印刷　東京ベル印刷

製本　佐久間製本

まえがき

まえがきだからといって、さて……とあらたまるほどの事はない。まだ、子供の時から
のいやしん坊（東京でいう食いしん坊とは、似て非なるところがある）を、歳の順序に羅列した
にすぎない。

ただ、この本を読まれた読者のみなさんは、きつといわれるに違いない。子供のころは
ともかくも、のちに成長していくばくかの収入もあったであろうに、ほんの何軒かの店の
ほかはあんまり筋の通った料理屋へも行くではなし、せいぜい法善寺界限か、キタで通る
曾根崎あたりでも、大してパツとしないのれんよりぐぐっていないではないか——という
声をきくであろうという事である。まったくそのとおりであって、これは私の幼くして育
てられたケチ精神ばかりではなくて、大阪の味の追究はそこにあつたと信じている。いく
らしい材料を旨く食べさせるにしても、その価がそれにつろくするのでなければ、大阪の
舌とふところは承知しないのである。旨くて、そして廉ければ千里遠しとしないが、積み
上げられたご馳走が、よしご招待でふところが傷まないまでも、価が張るだけでさのみ旨
と思わないものは歓迎しない。それが大阪人の味と好みであるといえると思う。そして、

それだけを追究しているのが、この本だと思つていただきたい。

もう一つ。私は酒場やキャバレーについて、ここに引用して語るほどの通ではない。が、かりにキタ・ミナミの称呼で呼ばれる花街で遊ぶとして、芸者遊びも、一流を相手に遊ぶばかりが能ではない。一流といつても、甲一・甲二・甲三……など、これらは主として地唄とか、長唄・太(義)・常磐津・清元……と、その技芸が標準で、一流必ずしも、若くて美しいとはかぎらない。よし、あつてもパトロンつきと思わねばならない。しかも、それらと歓を共にしようとすれば、やはりそれらと馴染みになり、雰囲気にとらねばならない。でなければ、こっちの気が張るだけで面白くもなんともない。そこへ行くと、いわゆる「オイッ、丙三」の蔑称はあつても、気の合ったザックバランな相手とでも、そこに三百円の親子丼の味はあるのである。——と、これは少し遠まわりなたとえかもしれないが——。

しかし、この本には、私の、元旦の夜の宗右衛門町大和屋の大散財さんざいもあれば、今はもう八百八橋といわれた水と堀との都大阪の、もう何処にも見られない舟料理の追憶もあり、そして、さらに五、六人で一杯になり、いつも戸外に列をつくる店もある。前口上はこのくらいにして、浪花友あれ誰だか巧い事をいったまず、食べ物は箸をつけていただかねば話にならない。そして、他にもよろしく御評判願うのみである。

目
次

まえがき

キ
タ

ビールとビールの中の大坂 11

幼き日々 14

カルメラ・チヨボ焼・アテモン 18

キタの中心 24

桂春団治との出会い 27

タダで見られる宝塚少女歌劇 31

狐うどんのこと 34

夜店の灯 39

文楽座と天婦羅 45

祖母の芸談 48

十三の春 50

カチューシャの唄 53

大阪駅の地下街 60

天神祭り今昔 65

船場・新町・堀江

こいさんのくれたチョコレート 73

ラッキョウ嫌い 79

サントリ―・鳥居信二郎 84

阿弥陀池の栗おこし 89

ミナミ

鴈治郎との出会い 95

キャバレ―・ドウ・パノン 102

ミナミのよさ 107

パウリスター・クレナイ・ライオン 110

関東大震災の種々相 114

鰻もまた修業のうち 118

法善寺裏へ	124
「正弁丹吾」と「二鶴」	127
春団治再会	135
すき焼漫步	142
柳家三亀松の酒	152
おんながたと天婦羅	160
甘いものへの招待	167
消えゆく灯	176
戦後のミナミ	182
現在のミナミ	193

新世界・阿倍野・住吉

去勢された食べ物の街

199

あゝ住吉 202

書き足りなかったこと

箱ずしのこと 213

女のこと 220

大阪の味 225

あとがき

カット・装幀 下高原健二

牛

夕

ビールとビールの中の大坂

新幹線が開通して、それまで大阪の表玄関といえ、そのまま国鉄の大阪の駅のことであつたのが、新大阪という、もう一つの新しい玄関が出来た。

新幹線のうち、駅名に新の字のつくところは、新横浜でも、新神戸でも、本駅から遠い。その中でも、新大阪はもっとも遠い。すべて、タクシー・バスの連絡だが、新大阪だけは、地下鉄が利用出来る。他の新にはないことだ。乗客も助かる。そして、新幹線開発事業当事者たちも、予定通りの成果をおさめつつある。

何しろ、万事、直線主義の新幹線である。京都からまっすぐに、淀川区へ入る。そして又一直線に……。東海道線のように、大阪へ発着するのに同じ新淀川を二度わたる愚（今となつては）を繰り返す事がない。第一、新大阪の場所は淀川区でも、その淀川には一顧もあたえず、尼崎に入つて神崎川を渡る時に一歪曲するだけで、またさらに一直線、六甲トンネルへと突っ込んで行く。そして、このごろは、大阪・新大阪両駅の間の土地も、ビ

ルの連立だが、ようやく予定通り發展したといえよう。が、かくて新大阪こそ、淀川区の中央に位し、文字どおり、大阪の、キタのいや果て——なのである。

と、私はうっかり、国鉄東海道線が、表玄関の大阪駅へ、東から入って西へ出るにも、また、その逆の場合にも、同じ淀（新）川を二度わたる愚を繰り返す——と書いたが、大阪の一つ東の吹田駅すいたから長柄ながらをすぎるあたりと、同じく一つ西の塚本（かつては神崎駅）へさしかかる時と、同じ新淀川を、二度渡るのだが、これを、現在、大阪人の中にでも、

「エッ。これ同じ川か」

と、あわてて車窓から、見馴れた川をあらためて見直す人が少なくないのである。そして、そこに、私はフト、その吹田の駅前にはアサヒビールの、そして神崎の駅前にはサッポロビールの工場があり、共に、一つずつ消えてはともる点滅式の広告ではあったが、子供どころにもへあつ、大阪はビールの中にある街やナ〜と思った。忘れられない。しかも、長じて、大阪は、西に灘なだの生一本、東に伏見の甘口あまぐちと、二つの酒どころの中にあると知るに及んで、

へやっぱり、大阪は酒どころや……

この『たべもの世相史』、どこで何から食いつくかと思っていたが、あの二つのビールの点滅からとは、われながらあきれる次第である。

大阪は、出入に同じ新淀川を二度わたる。明治六年、初めて大阪へ鉄道を引き入れる時、現在のその地点より北へは、新淀川があつて土地的發展は考えられず、その大阪駅さえ梅田（埋め田）というところ、鉄道敷設の時に田圃の一部に盛り土したので。

私は、いつか、その大阪の玄関口、それも梅田コマ劇場のある東口に立って、ふと、こゝは東京の有楽町の娯楽センターあたりに酷似しているナと思った。コマ劇場は日劇であり、小学校も曾根崎と泰明。地下道から二つの百貨店と映画館に結ばれるし、それを囲繞する飲み屋、食べ物店など、有楽町のは整然ととりすまし、それにひきかえ大阪のキタは雑然としていると思うが、どうかしら――。

幼き日々

私は、何をかくそう、その大阪のステーションにいちばん近い曾根崎小学校が母校であり、その近所に生まれて、小卒の十三の春まで、そこで育ったのである。

学校へ通い始めたころの大阪の駅前には、駅舎の歩廊に沿って、人力車がズラリと梶棒を並べていたもので、土埃の立つにまかせた広場は、チンチン電車の軌道を挟んで、軒の低い店屋が並んでいた。高い建物といえば、仁丹・中将湯の広告塔があっただけ。運送店・旅人宿・うどん屋・大阪名物の粟おこし屋・安カフェーなど。そして、もうそこに、アテナき人の男女口入所が押し合っていたのは、そのまま「駅前のあわれ」であった。

そして、その現在の阪神ビルあたりから西は、雑然とした中に、それでも、何軒目かのゆわこし（粟おこし）屋とうどんやのあいだの狭い小路を入ると、枝から枝へと無数の路地が蜘蛛の巣のように錯綜して、そこに、上かん（欄）屋・かんとだき（関東煮のおでん）・泡盛・うどん・ぜんざい・ミルクホール・焼鳥・つかみ鮎……。食い倒れ大阪の、いちばん